

日本文学研究資料叢書

島
崎
藤
村
Ⅱ

有 精 堂

日本文学研究資料叢書

島崎藤村 II

日本文学研究資料刊行会編
有精堂

日本文学研究資料叢書

ISBN4-640-32501-0

島崎藤村Ⅱ

定価 3200 円

昭和 58 年 6 月 10 日 発行

編 者 日本文学研究資料刊行会

発行者 有精堂出版株式会社

代表者 山崎 誠

101 東京都千代田区神田神保町 1-39

発行所 有精堂出版株式会社

電話03(291)1521~3 番

振替口座 東京 9-40684

Printed in Japan

ISBN4-640-30049-2 C 3393

目次

夢は長く……………	稲垣達郎…一
藤村の呪術……………	関良一…四

*

初期藤村の位相——大西祝との関連をめぐって——……………	安住誠悦…七
「星野天知自叙伝」と「黙歩七十年」……………	成瀬正勝…二〇
——主として「文学界」時代について——……………	
島崎藤村における「労働と文学」……………	笹淵友一…三
——藤村の労働神聖観とその軌跡——……………	

*

『若菜集』論……………	越智治雄…五
「若菜集」の世界……………	関良一…六
——その成立・形態・主題についての序章——……………	
ひとつの道標——島崎藤村「農夫」——……………	伊豆利彦…七
写生——子規と藤村——……………	下山嬢子…八

「破戒」試稿——自立への道……………佐々木雅発…三

藤村と仏教・試論……………山田 晃…二七

——「破戒」における仏基二教の共鳴——

「自分」「自分等」そして「播種者」……………中島 国彦…二四

——藤村『春』の一節から——

『春』への道……………中島 国彦…三

——成立過程とモチーフをめぐる——

家——まぼろしの三部作……………関 良一…三

老年と青春……………越 智 治 雄…一五

——『桜の実の熟する時』を支えるもの——

『桜の実の熟する時』論考……………伊 東 一 夫…一六

『新生』……………和 田 謹 吾…一九

ダンテの『新生』VITA NUOVAと島崎藤村の『新生』…剣持 武 彦…二〇

「新生」の基本構造……………藪 楨 子…二六

『嵐』の位置……………北 川 忠 彦…三〇

「力餅」について……………三 好 行 雄…三三

「夜明け前」の反近代	三好行雄・二四
------------------	---------

*

「千曲川のスケッチ」文体試論	重松泰雄・二五
----------------------	---------

藤村文体の変貌について	重松泰雄・二六
-------------------	---------

―「破戒」から「春」「家」へ―

島崎藤村における散文表現	杉山康彦・二七
--------------------	---------

*

解 説 ―今日の藤村研究、明日の藤村研究―	中島国彦・二九
-----------------------------	---------

島崎藤村Ⅱ研究参考文献	中島国彦・三〇
-------------------	---------

執筆者一覧	三〇
-------------	----

夢は長く

稲垣達郎

一九二〇年（大正九）は、田山花袋・徳田秋聲の生誕五〇年にあった。文壇はそれを慶祝し、贈るに『現代小説選集』一卷をもつてした。時の作家三三人が、おのおのの作品一篇ずつを提供したものである。編者は、島崎藤村・長谷川天溪・有島武郎・片上伸の四人であった。と書いてきて、わが文学界のまさに大きく回転してしまつたのをもうのである。これを贈つたがわの藤村と、これを受けたがわの秋聲が、一九四三年（昭和一八）あいっいで斃れたのを最後に、ここに挙げたかつての最大に有力な文学者たちが、すでにことごとく物故してしまつたわけである。

この記念版の「序の言葉」は、藤村が筆を執っている。そのなかで、「君等と共に歩いて来た長い年月のことを思へば、私は黙して居たいやうな気がする。夢は長く、行く路は難い」といっている。おもえばまことに長い年月である。秋聲と藤村は、その後も歩きつづけて、文字通り三代にわたるにいたつた。その間におけるそれぞれの文学の登音には、時には乱れもあり、また弛緩もなくはなかった。けれども、リアリズム文学への道を、身を以て徹底しようとしたがたは、共に巨匠とよぶにふさわしい。そして、先を争う

がように一時にいつてしまったあとは、吹く風の頃に蕭々たるをおぼえた。

そこには、日本近代文学の闘いと苦悶があつた。藤村にしても、そのいやはてまで、「夢は長く、行く路は難い」ものだったにちがいない。『夜明け前』をかき畢つた時に、これで書きたいものはすべて書いてしまつた、と語つたときいている。その場合としての心理上にはまちがいのないものであるが、ひとり静かに思つて、果して深い充足や安定を感じたであらうか。藤村は一方にまた、『夜明け前』は父の死後『春』までのところを書きたかつたと漏らしている。『家』をはじめ、『海へ』そのほかいろいろのところで、ほとんど憑かれたように寄せている亡父とその時代への思慕を、『夜明け前』によつて、かなりの程度に消化したにちがいない。だが、あの作における歴史から受けた復讐の暗鬱な不安の、流しきれぬ鉛のような重い灰色の澱はどうであらうか。おそらくは我慢のならぬ、そしてふたたび「長い夢」を先の方に求めなければすりぬけられぬ運命が、身近く迫っているのを痛感したはずであらう。

藤村は、まことにしばしば、「春を待つ」「夜明けを待つ」という

ことをいつている。そしてたとえば、「青年時代に踏み出した時と少しも变りのないやうな、それほど長い夢を今日まで見つけて居る。そして眼前の暗さも、幻滅の悲しみも、冬の寒さも、何一つ無駄になるものなかつたと思ふやうな春の来ることを信ぜずにはゐられないで居る」(『春を待ちつつ』)といつて、その春がめぐりこようとし、夜明けのほど遠からぬことを、おりおり感じはした。これをほかの言いまわしに従えば、「自分等の内部に高く太陽を掲げること」、そしてそういう太陽が自分の内部によみがえってくることを、時には感じるのであった(『太陽の言葉』)。しかし、藤村は、このような輝く太陽を、果していちどなりとも、完全に高々とかがげ得たことがあつたらうか。

右に引いたことは、いずれも『新生』以後のものである。『新生』は、芥川龍之介が『侏儒の言葉』で疑つたやうに、けつして『新生』をもたらしはしなかつた。だが、藤村自身もいふやうに、『新生』というものを明るいものとおもうのは、なるほどまちがひであるかもしれない。そういう考え方からすれば、藤村は『新生』を越えて、重苦しい暗い新生に身をおきうることを豫想したかもしれない。してみると、『春を待ちつつ』や『太陽の言葉』も、じつはそうした量のある、澄みきらぬ新生の豫想だったかもしれない。しかし、そのような新生の夢さえ、『新生』以降、遠く『夜明け前』にいたつても、いつてきたやうに、見果てえたものとはならなかつた。ここに藤村は、その最後の夢を追つて、当然、『東方の門』を書かなければならなかつた。さてしかし、『東方の門』を完成したとして、そのなかに高く太陽をかがげ得るものとなりえたであらうか。藤村の夢は、しよせん見果てぬ長い夢に終つたのではなかつたか。

ところで、藤村の夢とは何であつたらう。生の悦びであつたことにちがいはないが、さらにいえば、まさしく「春」——青春の悦びでなければならぬ。藤村は、その五〇の年をまさに送ろうとする時、「あのファウストのやうな紅顔緑髪の願ひは私には無い。今更若い昔にかへらうとするやうなことは、私の願ひとするところでない。どうかして私はまことの老年に行きたい」(藤村全集刊行会版『藤村全集』序の言葉)といつている。けれども、充実された青春を経ずして、誰がよく「まことの老年」にゆきうるものであらう。あの仙臺におけるわずかの例外をのぞいて、藤村には青春というものではなかつた。それはふみにじられた暗澹たるものだった。父とその時代へのあれほどの執拗な思慕も、そこをよりどころとしないでは、まったく成り立つものではない。

藤村は、この長い夢を、外貌はきわめてつつましく、内部では反対にうめくやうな激しさで、執念ぶかいまでに追い求めた。内の激しい欲情が、つつましい真摯なすがたのやうにあらわれたのは、もっぱら抑圧と分別を通してのものだったからである。藤村は、『動揺の上に静座する』ということばをおりおりつけた。芭蕉の生き方から思いつき、これをわが生き方に結びつけたのであらう。藤村の一般からの人氣は、一にかかつて、この「動揺の上の静座」に由来した。それがいかにも道德的にみえたからである。しかし、それはかならずしも静座ではなかつた。意識と分別のある抑圧であつた。芭蕉の静座とはおのずから異なるものがある。

そこへゆくとき秋聲は、きわめて放心的である。それは一般には非倫理的に、一種うすぎたなく感ぜられ、かならずしも人氣を博さなかつたわけであらう。けれども、この放心は、わたくしなどには、どれほどか親しみの深いものであることだらう。

(筑摩書房刊『稲垣達郎学芸文集』一、昭和五十七年四月発行。

初出は「工業大学新聞」昭和一九年一月二十四日発行)

藤村の咒術

関 良 一

藤村が、明治二十年、数え年十六歳の夏、第一高等中学校を受験したかどうか、これははっきりしない。だが、二十二年、十八歳の夏、一高を受けて失敗したのは事実らしい。その時、彼はそれまでの半ズボンに青と白の縞入りの靴下というはでなスタイルと諷刺し、短い小倉の袴、山桐の駒下駄をうがち、たぶんでれかくしたたろう、脚氣と称して、竹の杖について明治学院に戻った。そして、それまでは「いかげやの天秤棒」とあだ名された才氣煥発ぶりだったのに、急に「仙人」と呼ばれる陰鬱な書生に変わり、教師の質問には何一つ答えず、最下位から二番めという成績で卒業した。たぶん、籍は西欧風な学院に置いてはいるが、自分だけは国粹的な一高に学びつつあるという心意気だったのだろう。この時期は、「政治家」になるために彼の予定した一高・東大コースからはずれたという、その志望の挫折において、文学者志望が確立された時期だった。

「春」の岸本は、髪を剃らせ、青々と剃り立てた頭を鏡に映し、ニヤリと笑い、「頭は出来た。これから服装だ」とつぶやいている。「新生」の岸本も、もしバリーを引揚げる時が来たら、その時は髪を

剃り落とそうと予定しており、結局それを実行する。つまり、藤村は、少年時代、少なくとも学院時代から、「形」に賭けて来た。

学院時代の彼は、右のような事情で文学者志望を確立し、文学者としての自分の生涯について、かなりはっきりした青写真を用意していた。シエクスピア・バイロン・ゲーテが最高の詩人である以上、自分も日本のシエクスピア・バイロン・ゲーテでなければならなかった。少なくとも劇詩人でなければならなかった。また、ルソーが近代の先駆的思想家、文人であるかぎり、自分も日本の『懺悔録』の著者でなければならなかった。作家としての藤村の主要作品は、「破戒」「春」「家」「桜の実の熟する時」「新生」「嵐」「夜明け前」「東方の門」だろうが、最初の「破戒」はルソー的なものを同時代的に定着しようとする、晩年の「夜明け前」「東方の門」はそれを歴史的に定着しようとする試みだったのではないか。そして、西行・芭蕉が日本最高の詩人である以上、自分も現代の西行・芭蕉でなければならなかった。だから、彼は「旅人」でなければならず、バイロンとともに、ある朝、まったく突然に文学的成功を収めている自分を発見しなければならなかった。だから彼は、処女劇詩

「琵琶法師」が載った「文学界」創刊の日、明治二十六年一月三十一日の午後、東京を離れ、鎌倉に星野天知（春）の岡見兄を訪ね、必要な「告白」を済ませ、翌二月一日午前、汽車で東海道を下り、いわゆる「漂泊の旅」に立った。うそかまことか、石山寺に紫式部の霊を訪ね、琵琶湖の詩神のために「ハムレット」一巻を投じたという。

その数日後、彼は高知に旧友馬場孤蝶を訪ねた。その時、「古藤庵無声」という名刺を小使に渡したので、孤蝶は、誰が自分を訪ねて来たかわからず、ちょっと戸惑った。たぶん、藤村にとっては「琵琶法師」を書くことよりも、自分が「古藤庵無声」であることの方が必要だった。

ところで、旅立ちには動機が必要だった。東西の文人の伝記を渉猟して得た結論に従えば、それは「失恋」であるべきだった。だが、失恋するためには、まず「恋愛」しなければならなかった。そして、恋愛するには、女性に接近する必要があった。女性に接近する早道は、女学校の教師になることだった。だから彼は、旅立つ四か月前、明治女学校に就職した。その時、彼の心の中には、失恋の傷手に悩みつつ旅を重ねて行く自分の悄然たるうしろかげが、もうひとつにでき上っていた。あとは、「恋愛」し、「失恋」し、その苦悩を適当な証人に「告白」し、教会を脱退し、学校を辞職して旅に出るだけのことだった。

だから、二十六年四月十九日、吉野で天知から「愛人」佐藤輔（春）の勝子）が彼の「愛」を受け入れるということづてを得た彼は、それを拒否し、天知たちを戸惑わせた。なお、「春」には「彼は天知の方への一月余の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅した」とあるが、吉野の西行桜の下に会おうと指定したのは藤村の方

だった。

少なくとも文学者志望だった彼の場合、呪術の奥の手はやはりことばだった。彼が、いつごろから「草枕」「春」「新生」「夜明け前」などという呪言を発明し、それらを駆使するようになったか、よくわからないが、やはりその素地は学院時代だったろう。彼にとって「生」はダンテとともに「新生」であり、芭蕉とともに「旅」であった。それは「冬来たりなば春遠からじ」以上でも以下でもなかった。小説「春」は、ポッティチェルリの「プリマヴェーラ」にもとづいてそう名づけられたが、そのように、典拠はやはりルネッサンスの画家の作でなければならなかった。

もちろん彼の実人生が、彼の「旅による新生」だの「冬来たりなば……」だのというレイアウトどおりに運ばれるはずはない。だが、彼は、そういうくいちがいを認めよう、許容しようとはしなかった。だから、彼は、彼の実人生が、彼のレイアウトに一致していることを「実証」するために、その後の文学的努力のすべてを傾注した。彼の文学とは、そういう文学だった。

実際の話、彼は、ときどき「自分のやうなものでもどうかして生きたい」と繰り返しながら、生きて行けばよかった。彼流に言えば「旅」を続けて行けばよかった。そして、ときどき、たとえば七年ごとぐらいに（七年をひとくぎりとするのも彼の呪術の一つだった）、自分の過去を、予定してある例のレイアウトに合わせて切り取ればよかった。実人生の方が、どうしてもそのわくにはまらない場合は、容赦なく切り捨て、もしくは手を加えた。たとえば、『若菜集』の「草枕」が蕭条落莫たる秋にはじまり、長く暗い冬を経て、早春の幻想で結ばれ、小説「春」が関西の「旅」の終りから書きはじめられ、東北への「旅立ち」で終わっているように。

(筑摩書房刊・現代文学大系 9 『島崎藤村集(二)』)

月報 26、昭和四〇年六月発行)

初期藤村の位相

——大西祝との関連をめぐって——

安 住 誠 悦

一

まだその日の講演を受持つS博士が通らなかつた。初めて批評というものの意味を高めたと言ひ得るあの小社の哲学者の講演こそ、捨吉達の待ち設けて居たものである。そのうちにすぐれて広い額にやわらかな髪を撫でつけセンチヴィな眼付をした学士が人を分けて通つた。(略) S 学士の講演にかぎつて、その内容の論旨を列べた印刷物が皆に配布された。(略) 捨吉のところへも印刷物を配つて来た。嘗てそれを受取つて見て、『希臘道徳より基督教道徳に入るの変遷⁽¹⁾—好い題ぢやないか。』

と捨吉にささやいた。

恍惚、感嘆、微笑、それらのものが人々の間に伝はつて行く中で、学士は講壇の上から希臘道徳の衰へた所以、基督教道徳の興つた所以を文明史の立場から説き初めた。時とするとフロツク・コオトの後の隠袖^(かくそで)から白い帕子^(はんし)を取り出し、広い額の汗を押拭つて、また講演を続けた。時々捨吉は身内がゾーッとして

来た。清^{きよ}しい、和やかな、しかも力の籠つた学士の肉声から伝はつて来る感覚は捨吉の胸を騒がせた。それを彼はポーと熱くなつて来たり、また冷めて行つたりするやうな自分の頬で感じた。

(「桜の実の熟する時」三)

明治二十三年七月五日から十五日まで、基督教青年会主催の第二回夏期学校が、明治学院講堂でひらかれた。押川方義、海老名弾正、島田三郎、植村正久、中島力蔵、伴直之助、ノックス、デヴィス、ウインシャルド、ドラモンドなどの講師にまじつて、大西祝の三回にわたる講演があつた。⁽²⁾ 著名な伝道者、学者、政治家たちの出講があつたなかで、若き日の藤村をひきつけ、衝撃的な感動を与えたのは、当時まだ文科大学研究生で二十六歳の若い学究でありながら、すでに「国民之友」「六合雜誌」その他に評論を発表して注目されていた大西祝の講演であつた。

勝本清一郎氏によれば、藤村の思想的立場は、中世的に—キリスト教思想をへだてて—把握されたギリシヤ的な世界観を、原始神道に結合させた考え方にあり、藤村の意識に「西洋的中世風に把握したギリシヤ的世界観」をはつきり浮びあがらせたのは、大西の前記

講演であつた。⁽³⁾

これに対し、笹淵友一氏は、大西講演から受けた藤村の感動を、「厳肅な清教徒的な宗教思想への憧憬」の故であり、「キリスト教的倫理観、世界観への共鳴」に発するものとしている。勝本氏は藤村の理解していたギリシャ的世界観が人間の罪業の問題と密着していることを証明するために発言しているのに対し、笹淵氏は藤村とキリスト教の接触を探ることに着眼して言っているのであって、両者は異なった文脈のなかで、以上のように解しているのではあるが、そこに微妙なくいちがいを見せていることも否定できない。

「桜の実の熟する時」にせよ、「明治学院の学窓」その他の回想にせよ、藤村自身その感動の実質には直接言及していないとすれば、あらためて大西の所論そのものに立ちいつて、藤村の受けた感動の内容を外側から究明し、あわせてそれが彼の思想形成に持ち得た意味を考察する道が残されていると言えるだろう。

大西の講演は、ギリシャ道徳思想の一般的特質を論じ、ソクラテス、プラトーン、アリストテレスの倫理学説を概観したあと、ストア学派を経て新プラトーン派に至るギリシャ思想史の展開を客観的に跡づけることを主内容とするものであつた。聴衆がキリスト教主義の学校に学ぶ学生、教会員たちであることを考慮し、キリスト教道徳に關しては説明を簡略にし、専らギリシャ思想の本質究明につとめ、キリスト教思想をその対照によって鮮明ならしめるように意図されている。

希臘人の考では、吾人は天然に種々の性能を具へて居て、其性能の中で最も貴き所は理性である。さる故に其理性の指図に従つて現在具へて居る天性を過不及なく鈞合よく優美に働かして行くのが是れ吾人の職務である。其職を全うするが吾人の徳

である。此徳を修める人が即ち善美なる人性を完うしたと云ふものである。ソシテ此徳は此世で完うすることの出来、又吾人銘々の力で全うすることの出来るものであつて幽冥の世界、自然以上の界に吾人の徳を完うするの地を求め、又之を完うするの力を振るには及ばぬ。此現在吾人の前に広がつて居る万有は実に美はしき秩序と法則とを具へて居るもので之を靜に觀察する時は吾性の求を満足さするに足る、我等人間は此美はしき法界に生れ出でたる美しき花の如きもので、花の如くに生じ、花の如くに美を享け、花の如くに過ぎて逝く、何の恨みる所のあらうかと云ふが、是れ希臘人固有の思想である。

かくして、「自力的、自信的、自然的、美術的、個人的、現世的、知力的、貴族的、楽天的」な諸特質こそ、ギリシャ思想固有のものであり、ストア学派から新プラトーン派への展開は、かかる固有性から逸脱、ギリシャ思想の自滅にはかならない。ストア学派や新プラトーンが純正ギリシャ思想から逸脱したごとく、「第十九世紀の思想即ち彼等の所謂古学の復興以来も大に打ち混じて居る」キリスト教もまた、真正のキリスト教思想と見なすことを得ない。キリスト教思想本来の面目は、ギリシャ思想との対照点——「他力的、超自然的、神学的、博愛的、超世的、信仰的、平民的、厭世的」なるところにある。この意味からキリスト教が超自然的、超世的である本質を離れて世俗化すること——Worldlyになることも、パウロの真意を曲解して肉欲否定の態度を曖昧にするのも、共に本質を失つたものと言わなくてはならない。このようにして、大西の志向は、ギリシャ思想史を本源的なものからの逸脱遊離の跡としてながめ、ひるがえって、固有のギリシャ思想と固有のキリスト教との根本的な背反性を明確としようとする点にむけられていたと言つてもよい。

大西の立場は、キリスト教を媒介としてギリシャ思想を理解する
 というような、安易な調和を峻拒するにあった。そこには、ギリシ
 ャ思想を混入した俗流キリスト教を批判し、これをその純正に帰ら
 しめようとする意図が含まれていたと言わべきである。したがっ
 て、大西講演の内容に即する限り、藤村がキリスト教を媒介として
 ギリシャ思想に導かれたとする勝本説成立の根拠を見出すことはで
 きない。

しかしまた、笹淵説のように、藤村の受けた感動の実質を、「キ
 リスト教的倫理観、世界観への共鳴」とみることも、適切を欠くも
 のようである。大西の講演は、その内容が「当時としてはアカデ
 ミックなもの」であったのみならず、その論述態度も弁護主張も排
 し、「只だ純粹に淡白に事実と道理と研究」せんとしたものであり、
 ギリシャ思想とキリスト教思想とを明晰判明に対照するだけにど
 め、あえて「優劣高下に定むること」なく終始している。彼はま
 た、儒教とギリシャ思想、仏教と新プラトニ派に、類似する点のあ
 ることを言及し、ギリシャ思想とキリスト教思想との本質を明らか
 にすることの現代的意義を、つぎのように述べている。

此の儒教仏教基督教三つの道徳思想は向後如何なる処に衝突
 し、如何なる処に調和して行くであらう乎、之れは将来の歴史
 に属する事であるから今から預言することは六ツかしい、然し
 今日迄の諸国の道徳思想の歴史を見るに引きクルメテ云へば自
 然の思想と超自然的の思想との争と云つてよい、或時は人間
 自然の力の足らぬ事に失望して自然外の力を求めて、之によつ
 て徳を修める事が出来ると信じて居るが、又或時は此点に疑を
 起して来て、自然外の力などと云つて居るがツマル処は矢張自
 分の力で行つて居るのではないかといふ疑念を起して、又ズツ

ト自然的の思想に傾いて来る、ソシテ又其考で行いて見てドウ
 シテモよく行かぬ所から、再び超自然的の思想になつて来る、
 先づ此様な風に道徳思想の大勢と云ふものは動揺して行く様に
 見える。

たとえ、このあとに「超自然的道徳思想のよい代表者たる基督教
 の道徳思想が此後も世界の道徳界の一の巨大な力」となるべきもの
 であると、言っているにせよ、それは決して「プロテスタンティズ
 ムの清教徒的な厳格主義」や「キリスト教的倫理観、世界観」の絶
 對視念ではなく、むしろこれを相対化し、思想進化のひとつの主
 要契機として重視したにとどまる。このような大西の立場は、「進
 化論」らしい『進化』の概念を組み入れた理想主義⁽⁵⁾ともいふべき
 ものに発しており、従来の実証主義的進化論あるいは類推主義的形
 而上学を斥け、「批判主義的な認識論を仲介とした『目的ある進化
 (teleological evolution)』の形而上学」に支えられていた。そこに
 自然的道徳思想と超自然的道徳思想―儒仏の伝統的思想とキリス
 ト教思想との調和に対する翹望がなかったとは言えぬ。その限りにお
 いて、彼もまた当時のアカデミー哲学の基本方式と無縁だったので
 はなかった。それにもかかわらず、大西を井上哲次郎一流の国家至
 上主義的綜合から区別しているのは、彼が批評的綜合―「衝突研磨」
 を綜合に至る必然的過程とする自由主義を根本基調としていたこと
 ろにあった。

注

(1) 「精神的基督教」(内田老圃鶴・明23・10)には「希臘道徳移干基
 督教道徳之顛末」とある。「大西博士全集第五卷」(警醒社・明37)に
 は「希臘道徳が基督道徳に移りし次第」として再録。以下の引用は全
 集による。

- (2) 「精神的基督教」(前引書)に拠る。なお鷲山第三郎は「桜の実」のこの場面に描かれている人物として、タムソン、植村正久、押川方義、宮川経輝、沢山保羅、奥野昌綱、本多庸一の名をあげている(明治学院五十年史) 参照)
- (3) 「座談会明治文学史」(岩波書店・三三八頁)
- (4) 「文学界とその時代上」(明治書院・八二五頁)
- (5) 小田切秀雄「文学史」(東洋経済新報社「日本現代史大系」二〇四頁)
- (6) 古田光「明治アカデミー哲学」(青木書店・近代日本思想史第一巻二二五四頁)
- (7) 「教育勸語と倫理説」(「大西全集第六巻」五五頁)

二

たとえ大西の夏期学校における講演が前述の如きものであったにせよ、藤村がそれをどのように受取り、どのようなものとして自己の思想形成の契機たらしめたかは、別個の問題と言わなくてはならない。しばらく当時の藤村の内面生活を追ってみよう。

周知のように、「桜の実の熟する時」が描き、馬場孤蝶が回想しているように、明治二十年九月から二十四年六月に至る明治学院時代の藤村の精神生活は、分裂病質を実証するに足る画然とした前後の二期に分かれた。孤蝶の記憶によれば、藤村の生活態度が一変し、ミサンスロビック時代がはじまるのは二十三年暮から二十四年にかけての頃になっている⁽¹⁾。ただし孤蝶の明治学院普通学部本科二年編入は二十二年一月であるが、当時藤村は欠席を続けており、九月の新学期から再び教室に姿を見えるようになったが、その時の藤村は教師の質問にも応答せず、試験の答案も出さぬという風で、成

績優秀の学生であると聞いていた孤蝶を驚かせている。したがって、いわゆるミサンスロビック時代というのは孤蝶などとも口を利かなくなった事を指すらしく、実際には二十二年九月以後、孤蝶と交遊のなかった欠席中も含めればもっと以前に遡ることになるであろう。事実、蒔助氏の「初期藤村」に関する覚え⁽²⁾では、二十一年秋から二十二年春にかけて「最初の内部変化」が起ったことにある。このような変化の直接の原因を「桜の実の熟する時」に見える年長の女性との「あられもない浮名」を学友小倉鋭喜から忠告されたためとすれば、二十一年冬頃となるとする笹淵氏の推定も、蒔助説と符合する。要するに、二十三年七月夏期学校受講が、年長の女性との噂、性の目覚めから来る憂鬱、高等学校受験失敗などを動機とする精神的煩悶の時期、ミサンスロビック時代の事であったことは動かない。

蒔助氏は、夏期学校の終り九月の新学期に入ってから、高輪台町の西照寺に籠って、モオレエの「英国文人伝」のうち、十八世紀の詩人文人の評伝三冊程を抄訳したらしいと書いている。孤蝶が、対人的接触を続ける限り自己を偽らざるを得ないと考え、居所も知らせず寄宿舎へボン館を出て下宿に移り、「魚籃坂あたりの或寺」に行き、「西行か何かの木像」に向って話をしたり、庭先に鶴の降りている幻覚を見たりしたという挿話を伝えているのも、この時期のことと思われる。

「桜の実の熟する時」の叙述では、夏期学校終了直後、田辺の家に帰省中、「英国文人伝」の訳稿を焼いたことになっており、前記蒔助氏の推定とくい違っている。孤蝶も二十三、四年頃―ただしこの記憶は相当曖昧のようである―この訳稿の一部を見せられたことを記憶しており、それを焼いてしまったと聞いたのは「学校卒業後

間もないことであつたやうに思ふ⁽⁵⁾」と言つており、それとも一致しない。「桜の実の熟する時」の叙述は事実そのままになつていないと判断して間違いないであらう。

笹淵氏が「桜の実の熟する時」の叙述に従つて、大西講演による「キリスト教的倫理観、世界観への共鳴」から、文学をすてて「清教徒的福音主義に徹底しよう」として訳稿を焼いたのだとしているのは、事実と反することになる。訳稿執筆が夏期学校出席前後―すくなくともその直後にも続いていたとすれば、藤村は文学を放棄して清教徒的福音主義に徹底しようとしていたのではなくて、逆に、文学に新たな情熱を注いでいたことになる。

夏期学校は三週間ばかり続いた。普通の学校の講義や演説会では聞かれないやうな種々な講師の話が引継ぎ引継ぎあつた。いかに多くの言葉がそこで話されたらう。その中にはまたいかに空虚な声も混つて居たらう。(略)捨吉は桜の樹の方へ向いて幹事の配つて来た海苔巻を食ひながら、

『菅君、君は二葉亭の「あひびき」といふものを讀んだかね』
『あゝ』

初めて自分等の国へ紹介された露西亞の作物の翻訳に就いて語るも楽しかつた。日本の言葉で、どうしても彼様な柔かい、微細^{こまか}い言ひまはしが出来たらう、といふことも二人の青年を驚かした。(略)

夕陽の美は生れて初めて彼の眼に映じた。捨吉はその驚きを友達に分けようとして菅の居るところへ走つて行つた。友達を誘つて来て復た二人して山のはづれに立つた頃は更に空の色が変つた。天は焰の海のやうに紅かつた。驚くべく広々とした其日まで知らずに居た世界がそんなところに閃めいて居た。そし

てその存在を語つて居た。寂しい夕方の道を友達と一緒に寄宿舎へ引返して行つた時は、言ひあらはし難い^{いふべからず}歡喜^{よろこび}が捨吉の胸に満ちて来た。

(「桜の実の熟する時」(三))

捨吉の聞いた「空虚な声」のなかには、著名な伝道者たちの教条主義的な説教風の講演が含まれていたやうと推察することは不自然ではあるまい。二葉亭の訳業への驚嘆がそのまゝ「英国文人伝」訳を思い立たせたと考えられることも許されよう。芸術と自然へのみずみずしい憧憬と共感、そして何よりも語りかけうる文学的交友を得て嫌人癖から脱出できた喜びがそこにある。

もちろん「桜の実の熟する時」には、これに続いてつぎのような部分もある。

お前はクリスチャンか、とある人に聞かれたら捨吉は最早以前に浅見先生の教会で洗礼を受けた時分の自分だとは答へられなかつた。日曜々々に定^{きま}つた会堂へ通ひ説教を聞き讃美歌を歌はなければ済まないことをしたと考へるやうな信者氣質からは大分離れて来た。三度々々の食前の祈禱すら廢して居る。では、お前は神を信じないか、とまたある人に聞かれたら自分は幼稚ながらも神を求めて居る者の一人だと答へたかつた。あやまつて自分は洗礼なぞを受けた、もし^{ほんとに}真実に洗礼を受けるなら是からだ、と答へたかつた。

(「桜の実の熟する時」(四))

こうした心の変化は、「個人主義的な新教、即ちプロテスタントイイズムの内観」、自己反省と凝視の深化を示すとともに、信仰からの後退意識をも微妙に反映していないことはない。なぜなら笹淵氏も触れているように、たとえ信仰を棄てないにしろ、教会から離れるということは、日本人の信仰において、しばしば多く「信仰の喪失あるいは変質⁽⁶⁾」を招くからである。「桜の実の熟する時」の叙述